



Data

監督・脚本：ハイファ・アル＝マン
スール

出演：ワアド・ムハンマド／アブド
ウルラフマン・アル＝ゴハニ
／リーム・アブドゥラ／スル
タン・アル＝アッサーフ／ア
フドゥ／アルアヌード・サジ
ニー／ラファ・アル＝サーニ
ア

👁️👁️ みどころ

日本人にはエジプト、シリア、イスラエル等のきな臭い「中東情勢」は苦手だが、イスラム教（コーランの教え）はもっと苦手。しかし、いくら宗教オチの日本人でも、サウジアラビア人女性監督による、サウジアラビア人女優による「初」のサウジアラビア「発」映画を観れば、その女性差別の姿に唖然とするはずだ。

しかるに、そんな映画のタイトルが、なぜ『少女は自転車に乗って』なの？ そんなことは可能なの？ その「カラクリ」は、本作をじっくり鑑賞すればわかるはずだ。張藝謀監督の「しあわせ3部作」以上の、さわやかさとしたたかさをタップリと！



■□■生粋のサウジアラビア映画をはじめて観賞！■□■

地図を見ればわかるように、サウジアラビアは北東から北西にかけてイラン、クウェート、イラク、シリア、レバノン、イスラエル、エジプトに囲まれている。その面積は日本の約5倍で、人口は2714万人。もちろん宗教はイスラム教で、女性は10歳くらいから、親兄弟や夫以外の男性がいる場所では、アバーヤと呼ばれる黒い布で全身を覆い、ヒジャブという黒いスカーフで髪を隠さなければならない。さらに、結婚前の男女交際は禁じられ、結婚は親が決めることが多いが、「男性は宗教上、同時に4人までの女性と結婚することができる」というから、何とも羨ましい・・・、いやいや、西欧的スタンダードとは大違い！

他方、インドはハリウッドに匹敵する映画大国だが、イスラム国家であるサウジアラビアには映画産業はなく、映画館の設置さえ法律で禁じられているらしい。ところが、そん

な国でサウジアラビア人の女性監督ハイファ・アル＝マンスールが、サウジアラビア人の俳優を起用して、サウジアラビア国内で本作を製作したというから驚きだ。ちなみに、サウジアラビアは男女が公的な場所で一緒にいてはいけない国だから、ハイファ・アル＝マンスール監督は「屋内や学校の敷地内のシーンを除いて、私はバンに乗り込み、モニターを見ながら無線で指示を飛ばすというやり方」で本作を撮影したそうだ。また、「主人公を女の子にした理由のひとつが、私が自由に動き回れない分、まだ年若い女の子なら自由に動き回れるから」だそうだ。

パンフレットに『少女は自転車にのって』というタイトルの「作品研究」を載せている、著名な映画評論家・佐藤忠男氏でさえ、「これは私の見た最初のサウジアラビア映画である」と書いているから、私が生粋のサウジアラビア映画を鑑賞するのは、もちろんはじめて！



【少女は自転車にのって】

発売/販売：アルバトロス 価格：3,800円（税抜）

© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

■□■ 「しあわせ3部作」以上の、さわやかさとしたたかさを■□■

2008年の北京オリンピック開会式の総演出を務めた中国の映画監督・張藝謀（チャン・イーモウ）が「一人っ子政策」に違反したため、約748万元（約1億3千万円）の罰金が科せられたというニュースが1月10日付の新聞で報道された。昨年11月9日～12日の三中全会（第十八期中央委員会第三回全体会議）で「一人っ子政策」の緩和方針を打ち出した中国で、なぜ今そんな摘発が？

そんな疑問はさておき、張藝謀の1987年のデビュー作『紅いコーリャン』は世界に

衝撃を与えたが、「しあわせ3部作」と呼ばれる『あの子を探して』（99年）（『シネマルーム5』188頁参照）、『初恋のきた道』（00年）（『シネマルーム5』194頁参照）、『至福のとき』（02年）（『シネマルーム5』199頁参照）は、人間の善意とさわやかさ満載の心温まる映画。多くの日本人が、古き良き時代を思い出して涙した名作だ。張藝謀はその当時から、「新人女優発掘の名人」と言われ、魏敏芝（ウェイ・ミンジ）、章子怡（チャン・ツイイー）、董潔（ドン・ジエ）という、素晴らしい女優を発掘したが、本作でハイファ・アル=マンスール監督は、ワアド・ムハンマドという12歳の女優を発掘！章子怡は

1月13日に観た『危険な関係』（12年）では、プレイボーイから誘惑され、当初は強く拒否しながらもいつの間にかそれになびいてしまうという何とも悩ましい貞淑な未亡人役を演じたが、『初恋のきた道』での、お下げ髪で赤い服を着た、何とも素朴で可憐な少女姿は、多くの日本人の目に焼き付いている。

それに比べると、厳しいヒッサ校長（アフドゥ）の管理下（監視下？）に置かれている、女学校に通う10歳の女の子ワジダ（ワアド・ムハンマド）は、冒頭のシークエンスから、コーランの暗唱を手抜きしている様子がありあり。それどころか、彼女は自宅ではラブソングを集めたカセットを聞いたり、アバーヤをつけないままスニーカーで街を歩いたり、果ては（ちゃっかり報酬をもらいながら）友人の「逢い引き」の手伝いをしたり、と結構したたかだ。そのうえ、友人の男の子アブドゥラ（アブドゥルラフマン・アル=ゴハニ）が自転車に乗って自分より早く走る姿を見ると、「自転車競走で勝ってみせる！」「私も自転車に乗る！」と宣言。いやはや、自由への欲求は、どこの国でもすごいものだ。しかして、これだけ女性差別の強い国サウジアラビアだって、本作に見る10歳のヒロインは・・・？



『少女は自転車に乗って』 発売/販売：アール・トロス 価格：3,800円（税別）
© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

■□なるほど、日本の家族とは大違い！■□



『少女は自転車に乗って』 発売/販売：アール・トロス 価格：3,800円（税別）
© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

父親は外で働き、母親は自宅で料理。そして、子供が学校から帰り、父親も仕事先から帰ると、家族そろって楽しい夕食。それが昭和の経済成長時代のホームドラマの一般的風景だったが、本作では、ワジダの父親（スルタン・アル=アッサーフ）は1週間ぶりに家に帰ってきたらしい。母親（リーム・アブドゥラ）は、かなりの（すごい？）美人で、夫のためにあれこれと尽

くしている様子がありありだから、夫としてはあまり不平不満がないはず。ところが、ストーリーが進行するにつれて、男の子の跡取りがないため、父親は「第二夫人」を迎えようとしていることがわかる。母親はそれを嫌がり、夫を自分の魅力で引き留めようと努力しているが、さてその努力の成果は？なるほど、サウジアラビアにおける男女差別や結婚のスタイルとはこういうことだったのか、ということが本作を観ているとよくわかる。

他方、ワジダが通う女学校の校長は生徒にはメチャ厳しいことが、あのシーンこのシーンを観ているとよくわかる。生徒はみんな若い女の子だから化粧やマニキュアに興味を持つのは当然だし、異性にも関心を持つのは当然だが、ここまで厳格に禁じられてしまうと、その反動は・・・？現にワジダの友人の女の子2人は退学処分をくらってしまう始末だから、このままではワジダの退学処分も時間の問題・・・？

■□■なぜ、コーランの暗唱コンテストに？■□■

イスラム教徒がいつもコーランを読んでいるのは知っているが、コーランの暗唱コンテストまでであることにビックリ！コーランの好きな人が宗教クラブを結成するのは自由だが、冒頭のシークエンスを観ていると、ワジダはコーランより西欧のラブソングの方が好きなことがよくわかる。



【少女は自転車にのって】 発売/販売: アルバイトロス 価格: 3,800円 (税別)
© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

ところが、ある日ヒッサ校長の提唱で実施されることになった校内のコーラン暗唱コンテストにワジダが出場することを決めるとともに、自発的に宗教サークルへの入会まで決心したからビックリ！ワジダはなぜそんな風に豹変し、コーラン好きになったの？

その豹変ぶりに誰よりも驚いたのはヒッサ校長だが、実はワジダの狙いは優勝すれば1000リヤルの賞金をもらえるところにあっただよう。つまり、かねてより欲しい欲しいと思いついて、予約までしていた(?)自転車は800リヤルもするから、手作りのミサンガを学校で友達に売りさばくアルバイトや、「逢い引き」の協力をしてもらう手数料だけでは不足。そこで、ワジダはコーラン暗唱コンテストに出場し、優勝賞金をもらおうと狙ったわけだ。

学生時代に3回生の終わりまで学生運動をしていた私は、3回生の1月26日の誕生日を期して司法試験の勉強に切り替え、それから一年半後の10月に合格することができた。それは、ひとえに「集中力」のおかげだが、さてワジダの集中力は？本作ラスト近くには、母親がワジダに対して「あなたは集中すると無敵ね」と誉めるシーンが登場するが、私もまったく同感だ。もっとも、そこでヒッサ校長から「賞金を何に使うの？」と質問された時、正直に「自転車を買うの！」と公言したのは、いかにもマズい。しっかりしているようでも、やっぱりワジダはまだ子供・・・？いやいや、その後のヒッサ校長への「切り返

し]を見ていると、予想以上にワジダはしたたかだから、そのシーンにも注目！

■□■女は悲しい存在？そんな共感の中でも力強く！■□■

本作に見るような女性差別は、「コーランの教え」では、差別ではなく性差のある女性を保護するためと説明しているはず。しかし、西欧的、民主主義的教育を受けている私たち日本人(?)には、どうしても差別に見えてしまう。ワジダの父親が自宅に多くの友人たちを招いた食事は、母親の料理のすばらしさもあって大好評だったが、それでも第二夫人を娶る話を阻止することはできなかつたらしい。その結果訪れる、夫と第二夫人との結婚式を屋上から黙って見守るのは「第一夫人」としてはたまらなく悲しいはずだ。また、あれほど嫌だったコーランの暗唱コンテストでの優勝を目指して抜群の集中力を発揮し、1000リヤルの賞金を獲得したのに、そのお金で目標にしていた自転車を買うことすらできなかったから、ワジダもまた、たまらなく悲しいはずだ。

ド派手に花火を打ち上げながら開かれている結婚披露宴を眼下に見ながら、母親とワジダはサウジアラビアでは女は悲しい存在であるということを確認し合い、共感し合っていた(?)が、ハイファ・アル=マンスール監督が描く、本作のラストはそんな共感の中でも力強いものだ。その第1は、ワジダが母親に対して、父親に気に入られるために奮発して買ったはずの赤いドレスを着て、結婚式に「乗り込もう」と提案すること。もし、そう



なれば『卒業』(67年)でダスティン・ホフマン扮するベンジャミンがキャサリン・ロス扮するエレーンの結婚式に乗り込んだ時のシーン以上のインパクトがあるはずだ。第2は、ワジダからのそんな提案に対して、「もうドレスなんて、お金も使った」と言いながら、ワジダが予約していた自転車を見せること。「あの自転車でよかった？店主が取っついてくれたの。おてんば娘にと。世界一幸せになって。私の唯一の宝物よ」と言いながら母親がワジダを抱きしめるシーンは、まさにハイファ・アル=マンスール監督が女性差別の強いサウジアラビアでも「女性は力強く生きているぞ！」という宣言だ。

その後、颯爽と自転車に乗って広場に登場するワジダ。その姿を見てワジダとの自転車競走に挑むアブドゥラ。そのどちらが勝つのかは映画を観てのお楽しみだが、女は悲しい存在だということを共感し合いながらも、なお女は力強く！

『少女は自転車にのって』

発売/販売: アルバトロス 価格: 3,800円(税別)

© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

2014(平成26)年1月17日記